

Gikyohan Times

No.0020

GIKYOHAN TIMES

2022 年 5 月発行

運動部活動の地域移行に関する検討会議

当社は岐阜県の全小中高校に 100 年以上教科書を供給し続けてきて 2021 年度に、「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書によって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。スクールイーライブラリーの詳細情報は当社 HP

(<http://www.gifukenyohan.co.jp>) のバナーでご確認もできます。読書感想文コンクール等今後も岐阜県の読書推進をはじめとする教育サポーターをめざして参ります。岐阜県教販通信のバックナンバーも HP に記載しておりますのでご覧いただくと幸いです。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でならし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

4 月末、スポーツ庁の有識者会議である「運動部活動の地域移行に関する検討会議」が提言を発表した。それによれば、公立中学校の休日の部活指導を民間スポーツ団体などの地域に委ねる「地域移行」を、2023～25 年度の「改革集中期間」で進めることが明言されている。この 3 年間の「集中期間」のうちに、全ての都道府県で休日の部活の移行をおおむね達成することを目指すという。そしてさらに、将来に向けて、平日活動の移行も推奨するとしている。中学校の運動部活動の主体を学校から地域社会に移す制度改革が、いよいよ始まることになった。

戦後に学校生活を送った世代なら誰もが当たり前と思ってきた日本の中学校、高校の部活動は、実は他の国には例のない独特のシステムなのである。大多数の生徒が、いや学校によっては強制的に全員が何らかの部に所属し、教師が授業と同じくらいの責任を課せられ指導に当たるなんて、欧米人には理解不能だろう。

さすがに最近では、行き過ぎた強圧的指導や教師の過重労働が指摘されて、今回の改革に至ったわけだ。ようやく… というのがわたしの偽らざる実感である。1987 年の臨時教育審議会最終答申が生涯学習の理念を打ち出し、学校以外の学びの場でも学校と同等の学習成果を認める方向へ舵を切った段階で、部活動は学校外へ移譲する検討がなされても良かったはずではないか。

92 年からは月 1 回の学校週五日制が始まり、02 年には完全施行された。一方で 91 年にはサッカー J リーグが発足し、学校単位でないプロチーム下部組織で小中高校生年代が活動することが可能になるなど、従来から存在した中学生年代対象の少年野球リトルシニアも含め、地域における社会体育の場の整備が進んでいく。にもかかわらず、部活動の在り方が全くと言っていいほど議論の俎上に載らなかったのは、競技団体や学校側の意識が変わらぬままだったからである。学校側からは、生徒指導面での効用が強調されたが、部活動に費やす時間と労力を半分でも使えば、通常時に個別の指導ができたはずだ。ましてや、「部活イノチ！」とばかり個人的熱意を注ぎ込む一部顧問教師の存在が理由というのでは、本末転倒というものだろう。生き甲斐や熱意は、本務たる授業や生徒指導に向けてもらわなくては。スポーツ指導がやりたいなら、個人の立場で地域活動に加わってくれば大歓迎だ。ただでさえ、教師の仕事について首長や議員の政治家たちからの無理な要求が増大する中、土日まで部活動に取られることはさらなる過重労働につながり、教職志望者を大いに心配させている結果、志望者減による教員不足を招いている。

昨春文部科学省が設けた「教師のバトン」は、教職本来の魅力、本当のやり甲斐を再確認するのが目的だった。ただ、手段として SNS を使ったために混乱してしまい、残念ながら頓挫しているらしいものの、その狙いは評価したい。教員という仕事の魅力や価値を世間にアピールすることは重要だ。文部科学省は、あれに懲りずに、そのところへ再びスポットを当ててほしい。教職の本分は、部活動指導ではなく授業であり、日常での生徒との交流であるのだから。

昨春文部科学省が設けた「教師のバトン」は、教職本来の魅力、本当のやり甲斐を再確認するのが目的だった。ただ、手段として SNS を使ったために混乱してしまい、残念ながら頓挫しているらしいものの、その狙いは評価したい。教員という仕事の魅力や価値を世間にアピールすることは重要だ。文部科学省は、あれに懲りずに、そのところへ再びスポットを当ててほしい。教職の本分は、部活動指導ではなく授業であり、日常での生徒との交流であるのだから。